Japan Association of English Romanticism

進歩」には "Beneath the Good how far—but far above the Great" (123) がある。従来この行は、当代の詩人は「単純に善なるもの ("the Good") より遥か高みを飛翔するけれども、しかし真に偉大なもの ("the Great") より遥か下方に留まる運命にある」と解されてきた。これに対して森松氏は、詩人は「《至高善》("the Good") から如何に/下方であろうとも ── だが《偉大》とされるもの ("the Great") より遥かな高みを」行く、と解釈し、"the Great" と "the Good" の意味合いを 180 度転換させている。氏は、この偉大なるものが、「詩仙」において、暴政と権力により詩人と詩歌を圧殺する存在であることなどをあげて、自説を補強する。そしてこの偉大なるものが「墓畔のエレジー」では、詩人、そして村人の生き方に対立する「権力と世間的栄誉のみを価値あるものとする《世間》」であることを明らかにし、この詩のさらなる理解へと結びつけている。このような新解釈の提示は、長年の研鑽で築かれた該博な知識と、英文に対する鍛え抜かれた感覚の持ち主によってのみ可能なことであろう。

「後書き」によれば、森松氏はイギリス・ロマン派の自然を扱った著書を準備中とのことである。本書のブレイク論は、この新著への橋渡しの役割を持つものかもしれない。改めて述べるまでもなく、自然はロマン派研究の重要なテーマである。本書と新著から明らかになる森松氏の自然研究の全貌は、我々の研究を大いに裨益することであろう。一刻も早い上梓を待ち望みたい。

(山形大学教授)

Peter Otto

Multiplying Worlds: Romanticism, Modernity, and the Emergence of Virtual Reality

(Oxford: Oxford University Press, 2011. xiv + 332. £60.00)

笠 原 順 路

著者 Peter Otto は、現在メルボルン大学の教授で、1991 年の *Constructive Vision and Visionary Deconstruction: Los, Eternity, and the Productions of Time in the Later Poetry of William Blake* や *Blake's Critique of*

NII-Electronic Library Service

Japan Association of English Romanticism

Transcendence: Love, Jealousy, and the Sublime in 'The Four Zoas' (2000) などブレイク関係の研究から出発した学者だが、2010年に来日した折には射程を一層広げ、本書に結実するに至った18～19世紀の文化・文学全般に関する研究の成果を日本各地で講じたことは、会員諸兄姉の記憶に新しいことと思う。

本書の内容を一言で表すなら、イギリスの18世紀後半以降に於けるパノラマを代表とする仮想現実を作り出す、建造物(案)や大衆見世物装置の文化史的考察を軸にして、ロマン主義の時代から今日に至るまでの現実認識の変遷を、主要な文学作品をも適宜引用しつつ研究したもの、と言ってよい。

オットーは、冒頭、C. D. フリードリッヒの絵画『雲海を見おろす放浪者』(1818) を取り上げ、杖をついた紳士がこちらに背を向けて中央の岩山の頂上に立ち、眼前の雲海を見下ろしている構図が、絵画鑑賞者を絵の世界に引き込む勢いを持っている、つまり、鑑賞者が画中の人物の分身となる勢いを持っていて、それにより鑑賞者のいる世界と絵の世界の境界や、それぞれの位置する場所の現実性がうすれ、「世界」が増殖を始めること、そして何よりも、その人物自身の見ているものが、ことによるとパノラマ画である可能性が高いことを示唆し、この絵画を著者が本書全体で主張しようとする論旨を象徴的に表している好例として位置づける。

オットーが詳細に検討する18～19世紀にかけての、現実(actuality) を模倣した仮想現実(virtual realities)を作り出すさまざまな建造物(案)や大衆見世物の装置や作品群等の主要なものを列挙すれば――The Panorama (第1章)、The Panopticon (第2章)、The Temple of Health and Hymen (第3章)、Phantasmagoria (第5章)、Fonthill Abbey (第6章)、The Eidophusikon (第7章)、The Colosseum (第12章)、作品としての Radcliffe, *The Mysteries of Udolpho* (第4章)、Satan を描いた Martin の版画 (第7章)、Blake の *The Four Zoas*, *Milton*, *Jerusalem* (第8章)、Wordsworth の 'Composed on Westminster Bridge', 'The Cave of Yordas' episode in Book VIII of *The Prelude* (1805) (第9章)、*The Two-Part 'Prelude'* (第10章)、Mary Shelley の *Frankenstein*、De Quincey のエッセイで *Suspiria De Profundis* 所収の 'The Apparition of the Brocken' と 'System of the Heavens as Revealed by Lord Rosse's Telescopes' (第11章)、Hornor, *Illustrations of the Vale of Neath, Glamorganshire*、文学作品等のテーマとしての Aeolian Harps, Brocken Spectres (第9章) などが挙げられる。これだけでも、18世紀から19世紀英国

NII-Electronic Library Service

Japan Association of English Romanticism

の大衆文化や文学を総覧した感があるが、著者はこれらを実に詳細に検討し、観客/読者の側では、これらの建物/装置/作品を楽しむうちに、次第に確固たる現実意識が希薄になり、「仮想現実」にも似た現実意識が複数できあがってくる、と説く。これが本書題名の 'multiplying worlds' の意味である。オットーはこうした状況を「非現実の現実味 (the reality of unreality)」と呼び、それによって知覚された「現実なるもの」が現実らしからぬ様相を呈してきて「現実の非現実性 (the unreality of reality)」が生ずると説くのが、本書を貫く論旨である。

今、著者が列挙しているものを網羅的に説明する紙幅はないが、以下、骨子のそのまた中心となるパノラマと、詩の解釈に関する部分から『序曲』を取り上げ簡潔に紹介しよう。

パノラマとは、夙に R. オールティックが詳述している通りロバート・バーカー(Robert Barker)が 1787 年に考案し、またたく間にロンドンやパリなど欧米の主要都市に広まっていった眺望画と、それを展示し鑑賞するための特殊な建物である。その建物は円筒形で、中心部分から、建物の内側に展示された眺望画を鑑賞する仕組みになっている。1793 年にロンドンに建築されたパノラマ専用館は、直径 90 フィートの円筒形建物で、中心部分に柱があり、その柱の周囲に展望架台がある。展望架台は上部と下部に分かれていて、上部の展望架台からは 2700 平方フィートの眺望画が、下部から 1 万平方フィートの眺望画が望めるようにできている。これを見た王立美術院院長 J. レノルズは、パノラマ画が「絵画という限られた方法に比べてはるかに上手く自然を表現し、効果を生み出すことができる」ことを認めていた。

著者は、このパノラマ館に関する当時の言説を幅ひろく検証し、全方位を同時に見ることの出来ない観察者が全体の眺望を把握するには、今見えている部分から死角の部分を補うしかない、つまり受動的に把握した視覚データから逆に能動的に全体像を作り上げていかなければならなくなる、と説く。ワーズワスが「ティンタン僧院」で述べた言葉を使うなら「半分は知覚して、あとの半分は作り出した」現実認識を必要とする、と言う。こうした現実認識が、先に列挙したさまざまな建築や装置、さらには文学作品などに見られ、これが modernity を構成する、というのがオットーの主張である。

著者は、ワーズワスが 1805 年版『序曲』第 8 巻で述べた首都ロンドンの詩行において、群衆でごった返す大都市の印象を、Antiparos や Yordas の洞窟

NII-Electronic Library Service

Japan Association of English Romanticism

での印象に喩えている部分(VIII, 711–27)を取り上げ、それが「大都市の現実からの後退」を表しているととる従来の解釈を否定し、心が受動的に受け取った外界を、心を活性化させて(別の表現を用いるなら「想像力を働かせて」と言い換えてもよいかもしれない——評者)再創造したものであると主張する。しかし、オットーの指摘はこれだけにとどまらない。今の引用の直後に洞窟のなかで人が見る光景(VIII, 728–41)が、第7巻のロンドンの描写や、バーカーのパノラマ館と似てくるという事実から、結局はこれが、(リオタールの言葉を借りるなら)「現実そのものに現実味がなくなり、擬似現実が複数できあがってくる、超越的存在が存在しなくなった世界に特徴的な様相」を呈してくる、と述べる。だから、ロンドンの比喩としての洞窟の描写は、外界が内面化したものであると同時に内面が外在化したものであるのだ。オットーによるとこうした現実認識を可能ならしめている自我というものは、ロックが主張するような点的存在(a punctual presence)としての自我ではなく、ワーズワスが『序曲』第8巻761–64行で述べているような、拡散した(diffused)存在であり、自我がその一部である世界によって形づくられている存在であると同時に、そうした世界を形づくっている存在でもある。

本書の章立てを考えると、冒頭にパノラマがあり、その現実認識の仕方が他の大衆文化や文学にも当てはまるという論の立て方になっているのだが、恐らく、これまでのオットーの著作の順からするなら、まず文学研究者として、ロマン主義に特徴的な現実認識を得て、それが同時代の文化事象にも当てはまることに気づいたのではないかと推測される。だから大衆文化の方からこの領域に入っていった研究家、とりわけ全ての文化事象の背後に何らかの政治性を見ようという意図が最初からある研究家とは異なる評価を下しているところが多々生じてくる。例えば、第2章で論ずるパノプティコンは、その古典的先行研究であるM. フーコーの理論を、果敢にしかも地道に修正する結果となっている。パノプティコンとは、周知の通りJ. ベンサムが考案したが実現することのなかった、内と外の二層から成る一望監視式の監獄で、外周部の独房の方が明るく、中央の看守の部屋が暗いので、囚人から看守は見えないが、中央の看守からは独房の囚人がよく監視できるようになっている建物(案)である。オットーは、パノプティコンを、フーコーが『監視と処罰』(1975)で主張したように、監視と統制によって権力体制を維持する装置とはとらずに、囚人と看守が相互に仮想現実を利用/依存して、体制を維持し且つ囚人を更生するものとの

NII-Electronic Library Service

Japan Association of English Romanticism

主張を展開している。これなどは、ポスト構造主義に対する仮想現実主義——仮にオットーの立場をこう呼ぶなら——からの挑戦と言ってもいい。

万人に共通した現実が存在するかわりに、個々人が己の作り出した擬似現実のなかに棲んでいると主張する本書は、極めて大雑把な分類が許されるなら、ロマン主義文学の特質を鏡ではなくランプであると主張したM. H. エイブラムズの系列に置くことが出来るのかも知れないが、その最大の価値は、文学テキストから抽出されたロマン主義の特質が文化事象全般に当てはまることを説いた点にあると言えるだろう。

(明星大学教授)

NII-Electronic Library Service